

.....
書 評
.....

SF を科学する

どこまで真実? どこまで虚構?

石原藤夫, 福江 純 著

(講談社, ブルーボックス B-704, 1987年発行, 新書サイズ, 定価 ¥ 680)

タイトルと帯のうたい文句からの第一印象は, これがブルーボックスではなく SF 誌の記事では? というもの。しかし実際には SF 作品の批評というより, むしろ近頃の小説に頻繁に登場する物理や技術のアイデアを解説している。従って××社学術文庫や〇〇書店の新書としてもよいくらいだ。ただしそれらの本に比べ, 文章が楽しいので区別がつく。提案: タイトルを「SF を科学とする」ないし「SF が科学である」としてはどうだろう。サイエンスを推進する動機の一つとして, 想像力(創造力? 同音のこの語も)も重要なものは明らかなのだから。

本書では14人の作家(兼業も含む——後述)の17作品をとり上げている。全6章, それぞれ「SF=明日の現実」, 「宇宙はどうなっているのか?」などという題が付けられている。題材は宇宙モノが多く, スペース寄りでない未来社会やロボットモノがない。近頃の SF の傾向プラス著者たちの好みが明確に表われている。作家も現職(例: フレッド・ホイル, ロバート・フォワード)を含め理工系出身が圧倒的で, 小松左京が巨大な例外。クラークはリーダー技術者, ホーガンはコンピュータ技術者であったし, ホイルとセーガンは天文学者, アシモフは生化学者であった。フォワードはヒューズ・エアクラフト社の研究所におり, ニーヴン, ハイナライン, アンダーソン, ブリッシュ, クライトンらは大学で自然科学を専攻している。(ここで「前科」を詳しく述べたのは, 理工系出身なら面白い SF が書けるといふ宣伝のためではありません。)

さてこうした作家の手になる作品中のエピソードをネタに, 背景にある様々の概念をとり上げている。スペースモノが多いので, アイテムも真空・重力と重量・温度・オールの雲・銀河や宇宙の構造・中性子星・ブラックホール・星間分子といった非地球的環境を記述するものが目につく。

ことにブラックホールや銀河地理を展開するあたり, 縦横無尽の議論が実に面白い。これで, こうした研究が地球(人類)にとってなぜ重要かというあたりも突いてほしい気がする。ともあれ, この解説作業を通じて, SF が科学・技術のアイデアを「利用する」と力んではおらず, 単に「基づいている」状態にあることが示されている。今やこれらが SDI や商品税と並んで「現代(近代?)用語の基礎知識」のレベルなのだ。

この内容は10年前には書かれ得なかった。こうした情報の広まりは, 勿論ビジュアル・マガジンの隆盛に伴うものだ。だが現実にはまだ存在しないモノをとり上げる時, 絵という媒体が文字に負けてしまう。前者は判り易いが, 後者のもたらすイメージには受け手・読み手にとっての自由度がある。読み手が想像をふくらます余地があるのだ。だから SF 映画が作られる現代でも, 小説の形式が衰えないのだろう。

次にこの本のもう一つの特徴は, 冒頭の概論に述べたように, 文章がソフトで, 読んで面白いこと。読者におもねっているのではなく, 著者の柔軟な思考が成功を導いているのであろう。それにしても科学の解説書はビジュアルなものも含めて, なぜ面白くない・キョクツなのだろう。なぜ魅力ある文章を(自分もだが)書けないのだろう。恒星社の現代天文学講座とガンダムからの引用が並んでいても良いではないか。本書も材料はハードなものが多い。対象とした SF 作品ばかりでなく, nature, science, Ap. J., 理科年表などが用いられている。もちろん学術的な趣味は一切ない。

福江氏のあとがきを, ここで引用する。著者がこの言を自ら実行しているのだから。「『科学する』とは単に受身の姿勢ではけっして行えない……。まず自分で考え, かつ手を動かすこと。」……そういう人たちの書いた本です。

それにしてもブルーボックスは, なぜ縦書に固執するのだろう。(林 左絵子)

.....
お 知 ら せ
.....

JNLT とその技術開発に関する
国際シンポジウム

日本の7.5m 光学赤外線望遠鏡計画(JNLT)がその実現に向けて着実な歩みを進めております。この計画の推進機関である東京天文台が国立天文台に改組され, そのテンポがより速くなった感があります。このような時期にこれまでに進められた技術検討にもとづき世界におけるいくつもの大望遠鏡計画に参加している研究者・技術者と意見の交換を行う事は非常に有意義なものです。上記シンポジウムを光学天文連絡会主催, 国立天文台, 日本天文学会後援で下記のように開催しますのでお知らせします。

日時: 1988年11月29日~1988年12月2日

場所: 東京大学山上会館

内容: 1) 世界の望遠鏡計画
2) 大望遠鏡の技術開発
3) 大望遠鏡用観測装置

会場の関係で出席可能人数は100名です。このシンポジウムの詳細を知りたい方は JNLT シンポジウム組織委員会幹事 磯部秀三(東京都三鷹市大沢 2-21-1 国立天文台)まで申し出て下さい。(光学天文連絡会)